

総評 2021年7月分 杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。

「潮風にかこまれながら夜はただ／ひかりの無さ あなたはあなた」(白野)新潟県
「わたし、の存在の感触を捉えた瞬間のしずかな高揚が伝わります。こういう経験の記憶が生を豊かにしていくのかもしれませんが。

「歯医者さんで／口を開けながら／横目で見えるポスターの／湖のある国へ／行きたい」(まちりこ)埼玉県
私たちは、日常のこんなところで、心とからだは別の次元に置かれる、という経験をしているのですね。詩の入り口はどこにでもあります。

「母がうちわを使う音が／なんだか怖かった／夏の夜」(西 緑花)京都府
突風が耳元を走り抜けるときの音に似ていて、意外と穏やかではない音ですね。怖いと感じるのは、「母」のイメージとかけ離れた音に触れることで、一瞬、何かが醒め、その場の空気が変わるからかもしれません。そのとき、私たちは別の次元へと運ばれています。こういうところにも、詩の入り口があります。

「規定水域をこえて暴れる／天の川のように会いたい」(翠)東京都
「暴」と抑制のバランスがうまく言葉を作りだしていると思います。

「茹であがった豆が／いっせいに手を叩いた」(翠)東京都
空気を含んだ嬉しい音が鳴りそうです。詩のオノマトペを加え、作者の心のなかの音を表現してみてもよいと思います。作品にふくらみが生まれます。

「生まれも育ちも／銃後／片蔭だけがある」(細村星一郎) 東京都
この「片蔭」とは、光の欠けか、影の欠けか、あるいは、そのどちらでもあり、そのどちらでもないか。…というような饒舌な問いはさておき、寡黙に掘り込まれている蔭の濃さが印象的です。

「願いごと、空に昇ってゆけない／笹がむしゃくしゃ食っているから」(藤ほたる)神奈川県
笹が願いごとを「むしゃくしゃ食っている」という発想が非常に斬新です。みんなそんなことも知らずに無条件に笹を信頼し、自身の願いごとをくくりつけている、というわけですね。なんともユニーク、かつ鋭い批評性があります。

「発展したくないね、と／名も知らぬ花に／しゃがみ込んで囁く」(風船)東京都
「発展したくないね」という口語の違和感が心に残ります。人間との会話では口からこぼれる機会はずななさそうですが、花との会話では自然と出てくるのかもしれませんが。本心とは何か、言葉とは何かについて考えさせられます。

今月も力のある新たな書き手が現れ、投稿欄は熱気に満ちているように思います。それでは、来月も投稿を楽しみにお待ちしております。